

「夜毎の饗宴の名残り」—反逆する身体とジュイサンス—

"The Remains of the Feast" : The Revolting Body and Jouissance

大平 栄子

OHIRA Eiko

1

インド英語文学の転換点は Rushdie の *Midnight Children* (1981) であり、それ以降実験的文学が顕著になったと言われる。これと機を一にする注目すべき現象は女性作家の進出、活躍である。従来、研究対象外の存在だった女性作家たちのテキストにアカデミズムも市場も大いなる関心を寄せていることは1990年代に出版された大部な(3セット、全巻合わせて18巻)女性作家批評のアンソロジーの存在だけでも明らかである。(R. K. Dhawan, *Indian Women Novelists*) そこで取り上げられている若手作家の一人がGitha Hariharan (1954-) である。

今日インドは経済的発展に伴う急激な変化にさらされており、その中で、伝統的文化の消失への強い危機感を抱く政権がヒンズー至上主義を擁護するといった状況(伝統回帰に傾く状況)の下、従来、伝統の担い手とされてきた女性たちが、その変化にいかなる対応を示しているかといった視点から、テキストをみる、あるいは女性の抑圧の現実の表象の検討と共に、そのアプローチや戦略の有効性を検討するといったフェミニスト批評も盛んである。(M. Lal, *The Law of Threshold*; A. Bhelände & M. Pandurang eds., *Articulating Gender*; N. K. Jain ed., *Women in Indo-Anglican Fiction*; Ray, Sangeeta ed. *En-gendering India*, etc.)

Hariharanのテキストについての数少ない批評のうち、*The Thousand Faces of Night* (1992) (以下*Faces*と省略)における女性の主体形成の表象を検討しているのはKrishna Sarbadhikaryである。彼女はこのテキストの結末のつけ方——閉鎖的生活を強いられる婚家を出た主人公 Devi が、結局母の待つ拘束的実家に子宮回帰する——や伝統的神話や伝説に耽り、伝統の抑圧的様相にある種の親近性を示す Devi の描き方を問題視する指摘をしている。“Devi reunites with the “maternal-feminine,” seeking to be cocooned in an even narrower space, not able to take any independent decision, content to be a survivor.” (154) これはテキスト自体が内在させている自己転覆的多層構造や表象力を視野に入れることのできない短絡的批評である。確かに、女性の悲惨きわまりない抑圧的状况を乗り越え、主体形成をしていく主人公の力強い「声」が描出されることが不可欠な状況にあることは事実である。*Faces* にそういう声がないとはいえない。だが、この点における検討はここでの目的ではない。

Hariharan のもう一つのテキスト、“Remains of the Feast” (1992) (以下‘Feast’ と省略)を取り上げ、Hariharan 的反逆のテーマと彼女らしい猥雑感と身体表現がふんだんに見られる表象の方法を検討し、女の主体形成、あるいは「欲望する主体」をめぐる、い

かなる表象の力、文化形成力を示しているかについてみていきたい。反逆する身体は伝統的価値を転覆する力をもつものか、それとも娘にとって抑圧となる「食べる母」でしかないのか。あるいは、その両方の表象によって生じる解決不能なメッセージをこのテキストは円環構造（結末のあとに冒頭が続く）のなかで永遠に問いかける、といった見方ができるのだろうか。

2

‘Feast’ は Devi と曾祖母との間の愛着と分離の物語、いわゆる Mother-and-Daughter Fiction である。他の同じ内容をもつ物語、例えば、*Joy Luck Club* (1989) や *Annie John* (1983) や *Shizuko's Daughter* (1993) などといったテキストとの決定的違いは、Hariharan のテキストに充満する猥雑さや「におい」を含む polluting objects の存在である。これらはすべて Mother's Body から流出するもの、あるいはそれと関わるものである。

“The room still smells of her. Not as she did when she was dying, an overripe smell that clung to everything that had touched her, sheets, saris, hands.” (9) ——こうテキストは語り始める。いや、語り手である「わたし」は語り始める。故人である「あのひと」と「わたし」がどういう関係なのかここでは明らかにされない。十数行先で「あのひと」とは「わたし」の曾祖母であり、一般的な近親者以上の関係であることがわかる。二人は「ルームメートではないけれど」「二つの部屋を共有」する関係であった。“…we shared two rooms, one corner of the old ancestral house, all my twenty-year-old life.” (9) 「わたし」にとってはこれまでの人生におけるすべての時間を分かち合い、ふたつの空間に分かれてはいるが、ひとつの「先祖伝来の家」を共有する、いわば二卵性双生児のような関係ともいえる。だが、冒頭の文章は、二人がこれほど親密な関係であったことがわからなくても、十二分に衝撃的である。なぜなのか。瀕死の重病人であったときの曾祖母の身体から流出したものが彼女が触れた全てに染み付いて離れようとしめない。その「すえた匂い」は、Kristeva の概念に従えば、maternal body からでた the abject (いとおしく、かつおぞましいもの) を表象している、というためだけではない。執拗に母の子宮という繭の中へ取り込もうとするアメーバのような触手としてのイメージは、匂いのしみついたものが病床の「シーツ」や故人がまとっていた「サリー」だけではなく、“hands” にも、とあることによって強化されている。実にさりげなく、というか、そっけないまでに、ただ「手」と語られるが、看取り、手を握った人すべての「手」である可能性を残しながら、実は、「わたし」の握り締めた「手」であることは、読み進むうちに実感されてくる、というみごとな構図になっている。その「手」はあたかも Duncan 殺しに荷担したマクベス夫人の「血」に染まった「手」、どんな高価なアラビアの香料をもってしても拭い去ることのできない「手」のようでもある。“overripe” “clung” ということばから、その「匂い」が「おぞましいもの」を象徴していることは確かだが、冒頭の一文はマクベス夫人の永劫にまとう「穢れ」とは異なるベクトルを示している。「まだ」「におう」その「におい」は次のパラグラフの冒頭では “The room now smells like a pressed, faded rose. A dry, elusive smell” (9) となり、「まだ」は「今では」と変わり、「押し花のバラ」の「乾いた香り」のように「今にも消え入りそうな」頼りなげな、はかないものになる。

このように母なるものへの愛着と分離を部屋に残った名残りの「におい」の表象によっ

て描き分ける手法もみごとであるが、Hariharan の独特な表象は「身体性」の描写にこそ見られる。二人が生息していた部屋自体、あたかも「子宮」のようであるが、「押し花」自体、死者のみえざる身体性を表しているようだ。病に蝕まれた老いた身体がやがて「亡骸」になり、それでも身体からじくじく流出するものを封じ込めるように「鼻腔」や「耳」に「わた」が詰め込まれる。“…the wads of cotton in her nostrils and ears shutting us out.” (15) 剥製のような「もの」となったそれは、残された者たちから遠ざけられ、さらに“belated ardour”「執拗に止まろうとするにおい」も封じられる。このようにしてやっと死者の強烈な身体性はかすかな香りを残すだけの無害なドライフラワーとなる。だが、Hariharan の身体性の描出はこのようなものに止まらない。猥雑感の限りを尽して、彼女が描こうとする女の「身体」は愛着と分離の対象にされる「母の身体」ではない。それは「欲望する身体」、「反逆する身体」である。死の運命を楯に決起する主体としての「身体」である。それこそがこのテキストの身体の中なかでも最も激烈に躍動する大動脈の部分である。そして、それは九十歳のブラーミン階層の老婆 Rukumini の人生最後の時の「からだ」によって表象される。彼女は息子やその嫁やそのまた息子や嫁、とその娘（＝医学部生の「わたし」）と違って、自署すらできない“an ignorant village-bred woman” (9) であるが、10年前に亡くなった息子と嫁よりも“survive” (9) した強健な身体の持ち主であった。だが、彼女の身体に異変が生じる。首にあったこぶのような塊が癌化する。その時、ブラーミン（の妻）としてタブーを守り、不浄とされる食物を一切断ってきた、彼女のその禁欲的生活は一変する。「わたしたちの部屋」は突然不可食のものばかりを選んで食べる曾祖母と共謀者である「わたし」との夜な夜な繰り広げられる「饗宴」という非日常の世界に変貌する。

3

インドは不浄をもっとも危険視する文化をもつ社会の筆頭にあげられる。ヒンズー教の伝統を基礎付けている法典のひとつ、マヌ法典には「可食・不可食」の厳格な規制が記されている。(5章4節～56節)ブラーミンの文化では特定の食物だけでなく、食物一般を不浄なものともみなす。この点について Kristeva は “When food appear as a polluting object, it does so as oral object only to the extent that orality signifies a boundary of the self's clean and proper body. Food becomes abject only if it is a border … . A boundary between nature and culture, between the human and the non-human (Powers 75) と説明する。食物は自己の身体に侵入する他者（自然）、口腔という境界を貫通し “the self's clean and proper body” を侵犯するものであり、また、それは人間と「他者」＝「母」との始源的関係を築く “the oral object (the abject)” である。口から取り込まれるもの、あるいは口腔や身体から流出するものは Kristeva によると自他の区別で成立している文化、および「主体」アイデンティティの境界を不分明にし、脅かすものであるために不安を掻き立てるものであるという。摂食は境界侵犯による穢れを生むものであり、不可食のものの摂取は近親相姦のタブーを侵犯することへの不安を掻き立てるもの、近親相姦の禁止の上に構築される文化、Symbolic への「反逆」行為である。母なるものは “the impure is that which does not respect boundaries…” (Revolt 21) という視点から不純なものとなる。

G. Hariharan のテキスト、特に *Faces* と “Feast” はこういった polluting objects で溢れ

ている。身体から流出するものと亡骸への拘泥は徹底している。‘Feast’ではいきなり冒頭部分から瀕死の病人、末期のガン患者が触れたもの全て——シーツやサリーや手など——にまといついて離れない「すえた匂い」についての記述がみられる。さらに「おなら」(10)、「げっぷ」(13) 鼻から漏れるコーラのどろどろした茶色の液体 (14)、血管に点滴が挿入される一方で、鼻からポトポトとしたたりつづける透明で薄い液体 (14)、亡骸にこびりついた体液の乾いたにおい (15)、などなど。

この短編においては曾祖母の身体から流出したもの、と同時に、執拗に表象されるのは彼女の残した「におい」である。亡骸に付着した匂いは弔いのプロセスにおいて耳や鼻に詰められたコットンによって、シャットアウトされ、やがて死者の残した匂いはかすかなものとなり、今にも消え入りそうな、留めることが不可能なものとなる。この「におい」が the maternal body への愛着、欲望を表すとすると、母親と一緒に曾祖母の亡骸、身体を拭き、綿をつめる行為は愛着を断ち切る第一歩である。やがてそれは次の行為で完結する。Ratna は祖母の部屋の全ての窓と戸棚を開け放ち、空気を入れ替え、彼女の汚れたサリーをズタズタに引き裂き、空っぽになったその戸棚には買ったばかりの医学書ですきなく埋めるという行為にでる。これがテキストの結末である。「武装した兵士」のような書物はなにを示唆するのか。それはほんの小さな隙間にも止まろうとする「匂い」を封じ、自己の境界を守るための兵士である。しかし、その前に「わたし」は曾祖母の共謀者として、彼女の「復讐」を実行にうつし、もっとも不潔な店から店を回り、どんな人の手によってつくられたものかわからない菓子を食べまくり、1週間「下痢」になることを自らに課す。それが、女の物語りをディスコースとして語らずに、身体で語った曾祖母のための「復讐」の仕上げであり、女二人の反逆の物語りの結末である。

Kristeva はすでに見てきたように口から取り込まれるもの（流出するもの）は境界侵犯のアブジェであり、自己のアイデンティティを揺さぶる危険なものであるという。一方、T. Dabre は *The God-Experience of Tukaram* (1987) において食物の象徴するものについて次のような見解を示している。食物は “the symbol of the filial relation of the devotee to God.” (Intro. Xvi) 信者（子）と神（親）の関係を表象するものであり、食物は親の愛と養育（＝神の恩寵）の現れである、という。と、同時に帰依者たちは神からの愛と一緒に食することによって相互の絆を強める。食事は神との communion を深めるものである。

しかし、神が禁じたものを食したらどうなるのか。上記の視点からするとそれは神を冒瀆する行為ということになる。また、Kristeva の見解に従うと、境界侵犯行為、差異によって成立、維持される「父の名」、象徴的言語体系への反逆行為ということになる。“The Remains of the Feast” は最初 *Debonair* に掲載されたが、その時のタイトルは “Forbidden Fruit” である。これがキリスト教文化圏であれば、Eveが背負わせられた神への不服従の罪、食欲の罪を暗示していることは明らかである。このテキストは禁じられた食べ物に対するブラーミンの女性 Rukumini のすさまじい食欲さを徹底的に描いている。彼女の命じる食べ物を運ぶひ孫とによって夜毎繰り広げられる「饗宴」。ブラーミンにとって不可食とされる食物をせがむ Rukumini。それを密かに運び込むひ孫である語り手の「わたし」。この女二人が共謀して作りあげる「饗宴」がブラーミンの神との融合を表すものではなく、神への、あるいは信仰を支える体制、伝統に反逆する行為であることは明らかである。J. Ridell によると、父権的バラモンの伝統における女性支配は彼らに都合の良

い相続のシステムとカーストのヒエラルキー維持のために不可欠なものであったことを指摘している。(Daughters of Independence) Rukuminiの反逆とは、バラモンカーストとその父権制維持のための道具になることによってはじめて女に保証される魂の救済の道を放棄し、自らの欲望によって生き直すことである。彼女は死を目前にして謀反をおこし、欲望によってジュイサンス(快樂)をおぼえる。Rukuminiの歓喜はその身体性によって描きこまれ、不浄とされるものの反復(口腔からもれる液体など)によって猥雑感に包まれる。彼女は反逆する身体、欲望する主体(the desiring subject)として死に向かう。

ブラーミンにとっての食のタブーにことごとく違反し、身体を汚し(ブラーミンの視点)尽くして消滅へむかう Rukumini。欲望の権化、反逆の炎となって身を焼く尽そうとするかのようなすさまじい気迫が彼女の身体から発せられる。

怒りに満ちた反逆する身体は彼女の「首のこぶ」によって表象されている。それは「わたし」が子供の頃から、たたいたり、からかって引っ張ったりして親しんできた「ふくらみ」(“swelling”)である。M. Kleinの“good breast”に相当する、養育し、慈しむ母のメトニミーである。「わたし」が20歳になるまで二つの部屋を分け合い、その共有空間に棲みついた女二人の親密さを表象する親しみ深い「ふくらみ」は突如他者化する。癌化した「こぶ」(甲状腺腫) (“goitred lump” 79)は「炎の舌」となって、老いた身体を舐め尽くし、めらめらと焼きつくそうとする。そして、その舌が触れたものすべてを浄化する、という。異常繁殖した細胞の塊が浄化の炎に喩えられ、正常細胞がガンに侵される様が、炎によって浄化される、という意味をまとう。“Familiar swelling”が境界を越えて増殖し、「炎」のようにめらめら燃えながら行く手にあるもの全てを浄化する。境界侵犯のイメージ(不浄)と浄化とが結合されるといふ異様な表象によって、価値が転覆される。病(しかも転移するがん細胞に侵された身体)というブラーミンにとって、不浄視されるものが、浄化の炎に喩えられている。まったくの価値転覆的表象といえる。

この浄化の炎である首の腫瘍は何を表象しているのか。首に大きな「こぶ」のある曾祖母は“a moody camel”のように不意の訪問者にかみつこうとする。洞窟体験後の Mrs Moore (A Passage to India, 1924)のように、不機嫌で、彼女のように、死期が迫る時期になって、価値観の崩壊に遭遇している点も共通している。いや、Mrs Mooreは価値観の崩壊に動転し、やがて、それを受容し、hearing motherとしてのこれまでの受動的女の役割を拒否し、欲望する主体となるため、「自分の洞窟」に閉じこもることを宣言する。Rukuminiの場合は、すこしも動揺をみせることなく、これまで九十年の間従ってきた food taboo を、死を目前にして、あっさり破る。それは救済の約束をふいにすることでもある。そして、欲望の権化、餓鬼となって、ブラーミンにとって不可食のものばかりをむさぼり尽くそうとする。自らの身体を汚し尽くして、果てようとする、首に炎をまとう Rukumini。その「こぶ」は反逆する Body と化した Rukumini, the desiring subject となった身体、あるいは欲望そのものを表す。彼女の背中の、「みみずばれ」は“a bedsore… like angry red welt” (9)と形容されている。Hariharanのテキストの「赤」は欲望とそれを抑圧された怒りの色、復讐、反逆の色である。The good breast としてのふくらみはこのようにして the bad breast となる。

Rukumini の食のタブーへの反逆と歓喜は次のようにして始まった。90歳の誕生日の数週間前に寝込んだ彼女は、家族の説得を2ヶ月間無視しつづけた後、医師の診察を受けることに同意する。医師の帰宅後、病名を問いただされるのを恐れながら、“our room”に戻った「わたし」を捕まえ、Rukumini は「狡猾」な表情を浮かべ「わたし」の手をにぎり、一本一本の指に口をづけしながら、半ば閉じた目にはいちゃつくような様子すら浮かべてこう切り込む。“Tell me something, Ratna,…” 甘いことばで包まれた尋問に慌てて「何も知らない」と応える「わたし」。曾祖母は「いや知っているはずだ」と当惑げな表情を浮かべて次のような質問をする。“Those small cakes you got from the Christian shop that day. Do they have eggs in them?” (12) 狡猾そうに目を細め “…will you get one for me?” と畳み掛ける Rukumini。コミカルなはずし。それから Ratna は非ブラーミンの手になるケーキやアイスクリーム、ビスケット、サモサなどを「密輸」(“smuggle”) (12) し、菜食主義者の病人の部屋に持ち込む運びやとなる。「1世紀近く」もの間 “pure, home-cooked food” (12) しか口にした事のないブラーミンの未亡人にとって、不可食のものを体内に取り込むことは、まさしく麻薬に手を染めるに匹敵する逸脱行為である。そこに大いなる快楽がうまれる。家の者が寝静まった夜中、Rukumini はひ孫の手からパイを掴みとり、「卵」が使われているか、非ブラーミンの手になるものかを確認するまで食べようとしない。少々「夜毎の饗宴」に食傷気味の Ratna はさっさと儀式をすませようと、曾祖母の望む “password” を次のように与える。“Lots and lots of eggs,” “And the bakery is owned by a Christian. I think he hires Muslim cocks too.” (12-13) すると、Rukumini は歓喜とも苦悶ともつかないうめき声を “O000h,” とあげる。パイを堪能する彼女の快楽に耽る様は次のように描写される。小さなピンク色の舌を突き出し砂糖衣を舐める。歯のない口は「もぐもぐ」「びしゃびしゃ」と吸うような歓喜の音を奏でる。だが、麻薬と同じで、欲望はエスカレートしていき、彼女は一層大胆になり、さらなる冒険にのりだそうとする。ケーキに飽きた彼女は次にコークをねだる。病人向けの飲み物を用意しようとする Ratna の母。“a dutiful grand-daughter-in-law” (13) と語られる彼女は聞き分けのない祖母（かつては忠実な嫁であったのだろう）の要求に従いコークの入ったグラスを手渡す。“The lump on her neck moved in little gurgles as she drank. Then she burped a loud, contented burp ….” (13) さらなる冒険の結果彼女は次のタブーの食物を制覇する。“lemon tarts, garlic, three types of aerated drinks, fruit cake laced with brandy, bhel-puri from fly-infested bazaar” (13) だが、彼女の身体は死へと確実に向かい、飲み込むことすらできなくなる。口に流し込まれたコークの半分は鼻腔から “thick, brown, nauseating” な液体となって流れ出る。「ひりひりする」(14) と叫びながらも、病人食をかたくなに拒み、うわごとのように “Get me something from the bazaar. Raw onions. Fried bread. Chickens and goats.” (14) と要求しつづける Rukumini。

療養所で亡くなる Rukumini。その当日の様子描写は凄絶である。両腕をチューブや針でがんじがらめにされた彼女は目で部屋の中を探し求める。血管にぼとぼと落ちる点滴液、鼻から流れでる透明な液体は顎をつたわるよだれのような。不自由な手を握ったり開いたりしていた彼女は最後の力をふりしぼり奇跡的に声を発する。“Ratna” と。枕もとに駆けつける母と Ratna。臨終の祝福のことばを懇願する母。曾祖母の唇は声を発することな

く、だが猛烈な怒りを伝える。顔は細かな汗の粒で覆われ、顔の筋肉は逆上するかのよう
に引きつる。(怒りのことばが頻発。“furiously” “mad” “frenzied”) それから、突然思わ
ぬ力が狂ったように噴出し、彼女は点滴のチューブを腕からはずしてしまう。床にたたき
つけられる点滴用のIVポール。人生の最終の時、彼女は次のような要求をつきつける。
“Bring me a red sari,…” “A red one with a big wide border of gold. And, bring me peanuts
with chilli powder from the corner shop. Onion and green chilli bondas deep-fried in oil.”
(15) だが、彼女の声はごぼごぼと音をたて、顔と首は嵐の海の遭難した船のように揺れ
る。“She retched, and as the vomit flew out of her mouth, her nose, thick like the
milkshakes she had drunk, brown like the alcoholic Coke, her head slumped forwards, her
rounded chin buried in the cancerous neck.” (15) 執拗に反復される口腔から流出するも
のが、この臨終の場でも描出される。嘔吐物、鼻腔から流出するミルクシェイクのよう
などろどろの液体やコークのような茶色の液体、など。そしてこれまでの欲望と歓喜との対
は欲望とabject (おぞましいもの) の対に変わる。

5

家に運び込まれた「亡骸」にたいする「わたし」の凝視の描写には医学生としての視線
——“the body” (15) という呼び方に現れている解剖学的、分析的視線——が見られ、
一方双生児のようなひ孫として情緒的に反応する「わたし」の身体があり、両者の葛藤が
展開する。

ところで、「死体」というのは当然ながら最も強烈な「死」の日常への侵入の感覚、境界侵
犯の感覚を感じさせるもので、穢れという感覚を呼び覚ますものであろう。インドにおい
ては時として、瀕死の路上生活者に触れることを恐れ放置するといったことが起こる。イ
ンド滞在歴の長い、50代のオーストラリア人の女性はそのひとつの事例に聖なる地ハリド
ワールで遭遇し、その重病人を病院へ搬送しようとして、周囲の人の助けを借りようとし
たが、誰も応じてくれず、逆に彼女は狂人扱いされたことに納得いかないと語っていた。
それに対して、60代の実験医学の教授は「穢れ」を恐れるためであろうと応えていた。
(2001年3月パラナシイからチェンナイへ向かう車中の聞き取り) Kristevaによると、
“The corpse, …is the utmost of abjection.” “Abjection appears as a site of defilement and
pollution…” (Powers 4, 17) 「死体」は「アブジェクション」(穢れの場に現れる) の最た
るものである。

Rukumini の「亡骸」「死体」をめぐる Ratna と母の対立、葛藤、にこの境界体験の反応
の違い、すなわち、「母と娘」のおなじみのテーマ——癒着と分離——言い換えると、境
界侵犯への欲望と抵抗のそれ、がみられる。母と Ratna は家に迎えられた「亡骸」を清め
る。湿った柔らかな布で身体を拭き、「におい」“the smell of the hospital bed, the smell of
an old woman's juices of dying.” (15) を拭き取る。この過程で、Rukumini の「身体」は
くまなく医学生凝視にさらされることになる。それは先ず、the body と呼ぶことから始
まる。そして、その身体の皮膚は “dry and papery” (15) と形容される。しかし、その支
配的凝視は次の瞬間には揺らぎが見え始める。“The stubble on her head—she had refused
to shave her head once she got sick—had grown, like the soft, white bristles of a hairbrush.”
(15) 頭部の毛髪についての描写はすでに医学部生のものではない。「剃るのを嫌がった」

という感情移入を思わせる表現にそれは始まり、「ブラシの毛のように白く柔らかな」という形容に決定的に現れている。次にお腹の皮膚へと視線は移る。“Like crumpled, frayed velvet, the creases running to and fro in fine, silvery rivulets.” (15) それは「しわくちゃでぼろぼろになったヴェルヴェットのように、大きなしわは銀色の小川のようにあちこちくまなく流れている」という。ここにいたると、Ratnaの科学者の凝視は一転して、双生児のひ孫の目線となり、さらにネクロフィリア的執着心が貼り付いたものになる。

注目すべきは始めて「見た」曾祖母の「裸」への言及である。“the stiff, cold body that I was seeing naked for the first time.” (15) ヒースクリフが亡きキャサリンの葬られた墓場で「ため息」を聞いたように (*Wuthering Heights*, 1847)、Ratnaも曾祖母のとんでもない要求の続きをわめいている「声」を聞いたような気がする。だが、彼女はすでにもの言わぬ「亡骸」にすぎない。その残り香も排除するように鼻と耳に綿を詰められた亡骸はRatnaを遠ざける。次の瞬間にRatnaがとった行動は母を啞然とさせ、娘の正気を疑わせるものである。戸棚へ走り彼女は買ったばかりの「わたしのはじめてのシルク」のサリーを持ってくる。それは最も鮮やかな真っ赤なサリーであった。それを広げ彼女は「裸の身体」をさも「いとおしげに」被おうとする。“The red silk glittered like her childish laughter.” (16) Rukuminiのいつもの「子供じみた天真爛漫な笑い声」のように輝く真っ赤なシルクのサリー。あたかも死者の勝利の声のよう。だが、Ratnaに及ぶ境界の外の力はここまでで、その内側の力、母の怒りに満ちた次の行動はRatnaを境界侵犯への欲望から引き離す。“She rolled up the sari and flung it aside, as if it had been polluted. She wiped the body again to free it from foolish, trivial desires.” 「巻かれて放り出される」「穢れ」を帯びたサリー。「広げ」られたRatnaの愛着はこうして「巻かれ」刈り込まれ、日常感覚の内側に困り込まれ、境界体験は排除される。18年間も地中にあったキャサリンの死体の傍に葬られるヒースクリフの欲望を思わせるようなRatnaの逸脱行為。かつてのキャサリンの面影どころか腐乱しているかもしれないと、ネリーにとがめられた彼と一緒に肉体が溶け合うのもいいとうそぶいた、究極の境界侵犯的欲望に匹敵する欲望の表象がここにみられる。

結局 Rukuminiは未亡人の装束である「薄茶色のサリー」で茶毘にふされることになる。“They burnt her in a pale brown sari,…” (16) この表現は強烈である。彼女の欲望の「赤」は拒否され、火葬の炎は未亡人として彼女を「焼いた」。このように、彼女の欲望と、反逆も焼き尽くされた。次にみられる首の「こぶ」の形容に注目したい。“the bulging, obscene neck” (16) Ratnaの愛着を象徴する「ふくらみ」はここでは「卑猥な」「汚れた」ものになっている。次に展開するのはRatnaと解剖学との関係である。

I am still a novice at anatomy. I hover just over the body, I am just beneath the skin.

I have yet to look at the insides, the entrails of memories she told me nothing about, the pain congealing into a cancer. (16)

だが、それは解剖学のメタフォーを用いたRukuminiの知られざる「苦しみ」の探求への意欲を表す。駆け出しの解剖学者は「死体」から「皮膚」の下へ、さらにその中身「思い出のはらわた」へとメスをいれ、彼女との親密な生活の中でも語られなかった曾祖母の悲しみ、苦痛、怒りを解明しようとする。

彼女の残した唯一の「遺産」である残り香は日々薄れていく中で、Ratnaは夜毎極めつ

けの不潔なベイカリーや露店を幽霊のようにさ迷い歩く。そして、腐りかけた菓子を次々とむさぼり、むっとするにのする油であげたチリーを口にする。なぜか。そこに Rukumini を見つけるため。“I plot her revenge for her, I give myself diarrhoea for a week.” 彼女にかわって「復讐」を成し遂げるためである。曾祖母の身体を生きる Ratna。だが、最終パラグラフは Ratna の the Symbolic 復帰を物語る行為で締めくくられる。

タブー視される、欲望する「女の身体」を伝統的価値転覆的力をもつ反逆する身体としてここまで肯定的に、かついとおしさをこめて描出するテキストは少ない。そもそも、インドに限らず多くの文化において女性の飢餓感、貪欲、欲望は否定的イメージを伴う。従って、自らの欲望に「恥じ」を感じるような装置ができあがっているが、主体的生き方を容認しつつある現代社会において、女性は抑圧の新たな戦略に巻き込まれていることを、S.Bordo は警告している。「女の肉体」を見る見方は文化によって指示されている (*Unbearable Weight* 57) と彼女という。常に女の身体はメディアのかかげる「理想型」に届かない不完全なものとして評価され、生身の身体は矯正されるべきものとして存在させられる。こういう文化的状況のなかで、Hariharan は文化形成者の一人として、既成の文化による「女の身体」の見方(若さと美を賛美)を転覆する見方をひ孫の愛着を込めた視線によって老い病んだ女の肉体あるいはその亡骸の細部を描くことによって提示しているといえる。Cixous の言う女性作家の使命である、女性に押し付けられた「身体のイメージ」を壊し、「失われた身体」を再発見する、という価値転覆的、かつ創造的仕事を Hariharan は Rukumini の反逆する身体(伝統的視点からは hysteric body とみられたもの)が歓喜の肉体性を取り戻す様を描くことによって成し遂げている。

6

だが、落とし穴がないわけではない。このテキストに限らず、Hariharan の「母の身体」への欲望が彼女のテキストには濃密に潜在している。抑圧的伝統的価値への反逆である Rukumini の食のタブー違反行為とその歓喜は「母と娘の愛着と分離の物語」の枠の中では、その価値転覆的力を殺ぎ落とされてしまいかねない。家父長的バラモン文化に反逆する身体は娘にとっての the object になってしまうからである。Ratna は「匂い」や口腔や身体から流出するもの、といった「母の肉体」の名残りのしるしを通して、失われた「母の肉体」を取り戻そうとする。しかし、同時に、亡霊のような支配的「声」と化した「食べる母」からの分離への欲求も生まれる。彼女は母の身体への欲望を反響する身体となっていた。Kristeva は「死体」へのオブセッションは「食べる母」(“a devouring mother” Powers 102) と合体した主体の再生ファンタジーであるという。「亡骸」に異様な執着を示す Ratana だが、やがてそのオブセッションは最終場面で解消される。「母の肉体」に飲み込まれ、沈み込み、自我消滅(虚勢)を体験後、浮上、再生し the Symbolic へと帰還する「女の身体」。部屋に残る匂いを消し、Rukumini の「汚い灰色のサリー」をずたずたにし、空っぽになった彼女の戸棚に一部のすきもないくらいびっしりと購入したばかりの分厚い本を並べる Ratna。武装した兵士のようなその書籍はほんの少しの隙間からでも侵入しようとする「匂い」(「母の肉体」)をシャット・アウトする護符のようである。このようにして彼女は「安全で懐かしくかび臭い匂い」(10)のする胎内から脱出し、依存と共棲的關係を断ち切り主体形成への一步を踏み出す。

ただし、親密性と笑いと秘密を共有する共謀者たち二人のスペースである、「母の肉体」を表象する空間である「部屋」が、母と娘が共に再生するための場ではなく、母の死と娘の再生がセットになった場であることはいなめない。マラバー洞窟が Adela と Mrs Moore の二人が echo を共有する空間であり、Mrs Moore の死が Adela にヴィジョンを提供するという構図に似ている。最終場面にみられる「アブジェクション」——「汚いサリーをずたずたにする」——は、娘の母からの分離に伴う否定的感情の危険性をも暗示している。排除された「母の身体」は危険な「女の身体」としての文化的記号（自他の区別を超え、境界侵犯し、清浄な自己の身体を汚染し、呑み込む）となるからである。S. Bordo は心と身体の二重性という概念でみる文化は「身体」を否定性を帯びたもの、かつ「おんな」を「身体」（「自然」）とみなす文化のもとでは、女が否定性を帯びることになるという。（5）この否定に娘が荷担する構図。こういった分離や自立とも、母性的混沌への回帰とも異なる相互依存的共同性の可能性、sisterhood 的女同士の共生的関係はもう一つの「母と娘の物語」である *Thousand Faces of Night* において本格的に探られている。

Works Cited

I

Hariharan, Githa. "The Remains of the Feast." *The Art of Dying*. New Delhi: Penguin, 1993

II

Bhelande, Anjali & Pendurang, Mala. *Articulating Gender*. Delhi: Pencraft International, 2000.

Bordo, Susan. *Unbearable Weight: Feminism, Western culture, and the Body*. Berkely, Los-Angeles, London: Univ. of California Press, 1993.

Brontë, Emily and Anne Brontë. *Wuthering Heights and Agnes Grey*. 1847; Hawarth Edition AMS Press, 1972.

Cixous, Helene. "Le Rre De La Meduse." *La Venue A L'écriture*. 松本伊瑛子他訳 『メデューサの笑い』 紀伊国屋書店 1993.

Dhawan, R. K. *Indian Women Novelists: An Anthology of Critical Essays*. New Delhi: Prestige, 1st set 5vols. 1991, 2nd set 6vols. 1993, 3rd set 7vols. 1995.

Dabre Thomas, *The God-Experience of Tukaram : A Study in Religious Symbolism*. Pune, India : Jnana-Deepa Vidyapeeth, Institute of Philosophy and Religion, 1987.

Jain, Naresh K. Jain. *Women in Indo-Anglican Fiction: Tradition and Modernity*. Manohar, 1998.

Kincaid, Jamaica. *Annie John*. London : Vintage, 1983.

Klein, Melanie. *The Psycho-Analysis of Children*. 1932 ; Vintage, 1997.

Kristeva, Julia. *The Powers of Horror: An Essay on Abjection*. Trans. Leon S. Roudiez. New York: Columbia UP, 1982.

Lal, Malashri. *The Law of the Threshold: Women Writers in Indian English*. Rashtrapatinivas Shimla: Indian Institute of Advanced Study, 1995, rpt. 2000.

Mori, Kyoko, *Shizuko's Daughter*. N. Y. : Henry Holt and Company, 1993.

- Ray, Sangeeta. *En-gendering India: Woman and Nation in Colonial Postcolonial Narratives*. Durham and London: Duke UP, 2000.
- Riddle, Joanna & Joshi, Rama. *Daughters of Independence: Gender, Caste and Class in India*. New Jersey: Rutgers UP, 1989.
- Rushdie, Salman. *Midnight Children*. London : Cape, 1981.
- Sarbadhikary, Krishna. "Mapping the Future: Indian Women Writing Female Subjectivities." *Articulating Gender*. Delhi: Pencraft International, 2000.
- Shakespeare, William. *Macbeth*. 1623; *The Riverside Shakespeare*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1974.
- Tan, Amy. *The Joy Luck Club*. N. Y. : Vintage, 1989.